

【翻訳】

ヒュペレイデース断片『追悼演説』(訳)

野津 悌

はじめに

拙訳はアテナイの弁論家ヒュペレイデース (B. C. 390 - 322) による『追悼演説』の日本語訳である。ヒュペレイデースは B. C. 4 世紀アテナイにおける反マケドニア運動の主導者の一人であり、この『追悼演説』はマケドニア支配に対するギリシア諸ポリスの抵抗として生じたラミア戦争 (B. C. 322) における戦没者の国葬に際して彼が行った演説であると考えられている。拙訳においては、底本として C. Jensen の校訂による *Hyperidis Orationes sex cum ceterarum fragmentis*, Stuttgart 1963 所収のテキストを使用し、*Minor Attic Orators ii*, London, 1954 所収の J. O. Burtt による英訳、並びに、*Hyperide Discours*, Paris, 1968 所収の G. Colin による仏訳を参照した。ヒュペレイデース作として現存する弁論 6 編のテキストはいずれも 19 世紀にエジプトで発見されたパピルスに基づくものであり多くの修復困難な箇所を含む。拙訳においては、校訂者 Jensen が修復困難であるとみなし欠落箇所として残した箇所は (… 欠落 …) と表記し、当該箇所に関する別の学者らによる修復案は拙訳注において紹介するとどめた。訳出の際、本演説の内容上の構造が明瞭になるように本演説を幾つかの部分に区切り、各部分のはじめにその内容の概括を < > にいれて示した。また、訳文の意味を明確にするために訳者が補った言葉を [] で括った。

訳

< 1. 導入 >

将軍レオステネースについて、そしてまた、勇敢な人々であるが故に彼と共に戦死した他の人々について、この埋葬の場においてこれから語られることになる言葉に関しての証人は (… 欠落 …) 時そのもの (… 欠落 …)

これらの戦死者たち以上に優れた人々も一層立派な行為も(… 欠落 …)⁽¹⁾。それゆえにまた私の言葉が実際の業績よりも劣ったものであることが明らかになりはしないかと私はとりわけ恐れている。しかし私は、私が語り残す諸々の点を聞き手であるあなた方が付け加えてくれるであろうことで、逆に安心していてもいる。なぜならこれらの言葉は、行き当たりばったりの人々の中でではなく、かの人々によって為されたことについての他ならぬ証人たちの中で語られることになるからである。

〈2. 賛美すべき三つの対象：アテナイ、將軍レオーステネース、その他の戦死者たち〉

一方で、我々のポリスを決断ゆえに、すなわち、それが以前に為したことと同様のこと並びにそれ以上に尊敬に値しかつ立派なことを決断した点において、賛美するのがふさわしい。他方で、戦死した人々を戦争の際の勇敢さゆえに、すなわち彼らが先祖たちの武徳を辱しめることがなかった点において[賛美するのがふさわしい]。さらにまた、將軍レオーステネースをその両方のことのゆえに[賛美するのがふさわしい]。というのは、彼がかの決断をポリスに提案した本人であり、かの遠征において市民たちを指揮した人だったからである。

〈3. ポリスへの賛美〉

ところでこのポリスに関して、それがかつて全ギリシアに対して施した数々の事柄の一々を詳細に語るためには、手許にある時間は充分でもないし、この時間は長々と話すのにふさわしい機会でもなく、さらにまた一人の人間がかくも多くのかくも偉大な諸行為について詳しく語り述べるのは容易なことでもない。しかしこのポリスについて要点のみ語ることを私は躊躇しはしないだろう。ちょうど太陽が全世界にゆきわたり、適切に四季を分かち、見事に万物を配列し、節度ある正しい人々のために出産と養育と収穫とその他生活に役立つ全てのものに関して配慮するのと同じように、我々のポリスは、絶えることなく、悪しき人々を懲らしめ、正しき人々を助け、不正の代わりに平等を分け与え、自分一個の危険と出費とによってギリシアの人々に共通の安全を提供しつづけているのである。

〈4. レオーステネースとその他の戦死者たちへの賛美〉

さて既に述べたように私はこのポリスの公的な業績の数々について語るこ

とは（… 欠落 …）⁽²⁾ することとし、レオステネースとその他の人々について語ることにしよう。

＜4. 1. 彼らの生れを賛美する必要はない＞

では私はどこから語り始めようか。何を最初に語ろうか。彼らひとりひとりの種族について語ろうか。しかしそれは馬鹿げたことだと私は考える。なるほど様々な所からひとつのポリスに集まって自らの種族を各自が持ち込む形で暮らしているような他の人々を称賛するのだとしたら、当然ひとりひとりの人間ごとに出自を語るべきである。しかし私は、土着の民であり比類なき生まれの善さという点で共通の出自を有するアテナイ人たちについて語るものであるから、諸々の種族について個別に称賛することは無用のことと考える。

＜4. 2. 彼らの受けた教育を賛美する必要はない＞

では、彼らの受けた教育に関して、そしてまた人々がなすのを常としてきたように彼らが子供の頃にどれほど偉大なる分別のうちで養育され教育されてきたのかに関して、語ることにしようか。しかし私が思うに、我々が子供たちを教育する目的が、彼らが勇者となることにあるということは万人の知るところである。しかるに、戦争において卓越した勇者となった彼らが子供の頃に立派に教育されてきたことは明々白々である。それゆえ私が思うに、もっとも簡単なのは、かの戦争での武勲について、そしてまた祖国とギリシア人たちのために彼らが如何に多くの善きことの原因となったのかについて、詳しく語ることなのである。

＜4. 3. 将軍レオステネースへの賛美＞

最初に私は将軍から始めることにしよう。そして実際それは正当なことである。何故ならレオステネースは、全ギリシアが辱められ、（… 欠落 …）⁽³⁾ 怯えさせられ、自らの祖国に逆らってピリッポスとアレクサンドロスから賄賂を受け取った人々によって破滅させられていることを察知すると共に、我らのポリスにおいては一人の男が、そして全ギリシアにおいては先導役として指揮を振るうことのできる一つのポリスが必要であることを〔察知して〕、自由を獲得するために、自らをこの祖国にそしてこのポリスをギリシア人たちに捧げたからである。

そして彼は傭兵軍を組織する一方で自らは市民軍の指揮官を任せられ、

ギリシア人たちの自由に対する最初の敵対者である、ボイオティア人たち、マケドニア人たち、エウボイア人たち、並びに彼らを味方するその他の人々をボイオティアで戦って打ち負かした。

それから彼はテルモピュライに到達し⁽⁴⁾、前にも蛮族たちがそこを通過してギリシア人たちのもとへと向かって行った通路を占領してアンティパトロスのギリシアへの進軍を阻止する一方で、その地域で彼を見出し、戦って打ち負かし、ラミアの地に封じ込めて包囲した。

そして彼は、テッタリア人たち、ポーキス人たち、アイトーリア人たち、並びにその地域の全ての人々を味方にした。これらの人々が望まないにもかかわらず彼らを主導していることをピリッポスとアレクサンドロスは誇りにしていたのであるが、レオーステネースは彼らが望んでいる状態において彼らに対する主導権を握ったのであった。

彼は決断した行為を思い通りに果す結果となった。しかし彼は運命に打ち勝つことはできなかった。常に第一にレオーステネースに感謝を捧げるのが正当であるのは、彼の行った事柄に対してだけではなく、彼の死後生じた戦いに対してもしかりであり、この遠征においてギリシア人たちに生じたその他の諸々の善に対してもしかりである。レオーステネースによって築かれた土台の上に今日の人々は以後の行為を構築するからである。

<4. 4. その他の戦死者たちへの賛美>

また、私が他の市民たちについては如何なることも語らず、レオーステネースだけを称賛しているとは考えないでいただきたい。というのは戦争におけるレオーステネースに対する賛美は他の市民たちへの称賛ともなるからである。というのは、見事に戦略を立てることの原因をなすのは將軍であり、戦って勝利することの原因をなすのは進んで身体を危険に曝そうとする人々だからである。従って、私が現実のものとなった勝利を賛美するときには、レオーステネースの采配と共に他の人々の勇気を称賛していることになる。

この戦争において命を落とした市民たちを賛美することが正しくないはずがない。彼らは、ギリシアの自由のために戦って命を落とすことこそがギリシアに自由をもたらそうと望んでいることの最も明らかな証明であると考えて、ギリシア人たちの自由のために自らの生命を捧げたのであるから。

彼らがギリシアのために奮闘することになった背景には、最初の戦いがボ

イオティアにおいてなされたことが一役買っている。何故なら彼らは、テバイ人たちのポリスが衰れにも人々のもとから消し去られ、そのアクロポリスがマケドニア人たちによって警備され、住民たちの身体が隷属させられ、その領土を[住民たちとは]別の人々が分配しているのを目撃し⁽⁵⁾、そして、彼らの眼前で目撃されたこれらの恐ろしい事態が、すぐにでも危険を冒すための臆することなき豪胆さを彼らに与えたのであった。

さらに、テルモピュライとラミアでの戦いは、アンティパトロスとその同盟者たちを戦闘によって打ち負かしたという理由だけでなく、その場所ゆえに、つまり戦闘がそこで起こったことゆえに、ボイオティアでの戦いに劣らず彼らの評判を高める結果となった。何故なら、年に二回、全てのギリシア人たちがアンピクテュオニア会議⁽⁶⁾に赴き、彼らの成し遂げた戦功の目撃者となるだろうからである。この人々のはかの[テルモピュライの]地に集まるやいなや彼らの勇気を思い出すことになるだろう。実際、徳こそが力であり、多くの人数ではなく勇気こそが主力であると考え、これ以上に立派なことを目的として、これ以上に強力な敵に立ち向かって、これ以上に少ない仲間たちと共に戦った人々は過去に存在しなかったのである。

かくして彼らは、自由ということを全ての人々に共有のものとして与え、行為による誉れを固有の栄冠として祖国に授けたのである。

＜4. 5. レオーステネースたちが戦いに敗れていたらどうなっていたか＞

ところで、もしも彼らが時宜にふさわしく戦うことをなさなかった場合にどのような結果になったと思われるかを推論してみるのも価値あることである。[その場合には]世界全体が一人の独裁者に隷属し、ギリシアはその人の気まぐれを法とみなす事を余儀なくされる[という結果になった]のではないか。要するに、正義の力ではなくマケドニア人たちの傲慢が人々のもとに蔓延することになり、それゆえに、人々の間では、女達や娘達や子供達の思い上がり尽きぬものとなら[ずにはい]⁽⁷⁾ない[という結果になった]のではないか。このことは、今なお我々が強制されていることから明らかである。つまり、人間たちのために祭祀が催されている様子や、彫像や祭壇や神殿が神々のためにはいい加減に[仕上げられ]人間達のためには入念に仕上げられている様子や、彼らの奴隷達⁽⁸⁾を英雄であるかのように敬うよう我々が強いられている様子を眺めること[を我々は強制されているのである]。マケド

ニア人たちの不遜な振る舞いのゆえに神々に対する掟が無にされているのであれば、人間たちに対する掟はどうなっているとみなすべきだろうか。それは完全に廃されてしまっている[とみなすべきではないか]。かくして、結果すると予想される事態が恐ろしいものであると我々が思えば思うほど、戦死した人々がそれだけ一層大いなる称賛に値することを我々は認めるべきなのである。

＜4. 6. レオーステネースとその他の戦死者たちの生は幸福な生であった＞

実際、如何なる遠征も、今回の遠征ほどに従軍した人々の勇徳を明らかにしなかった。今回の遠征においては、日々戦列に配置されることを余儀なくされ、また彼ら以外の人々が過去に殴られた⁽⁹⁾数よりも多くの数の戦闘を一度の遠征の間に戦うことを[余儀なくされて]、さらには、これ程に数多くのこれ程に激しい極度の悪天候と日常必需品の欠乏とに、言葉によって語ることが困難であるほどの我慢強さをもって耐え忍ぶことを[余儀なくされたのである]。

これほどまでの忍耐に臆することなく踏みとどまることを市民たちに説得したレオーステネース、並びに、自ら進んでそのような将軍と共に戦って自らを捧げた人々のことを、生命を失ったがゆえに不幸な人々であるとみなすべきではなく、むしろ、勇徳を実証しえたがゆえに幸福な人々であるとみなすべきではあるまいか。これらの人々は死すべき身体を持つものでありながら不死の名声を獲得し、自分一個の勇徳の故にギリシア人たちに共通の自由を確かなものとしたからである。

実際、自律こそが完全なる幸福をもたらすのである⁽¹⁰⁾。というのは、人間による脅迫ではなく法の声こそが幸福な人々の支配者であるはずであり、告発されることではなく論駁されることこそが自由人にとっては恐ろしいもの[であるはずであり]、権力者たちに媚びへつらう人々や市民たちを中傷する人々にではなく法という保証にこそ市民たちの安全は依存している[はず]だからである。そして彼らはこれら全てのこのために、苦勞に継ぐ苦勞を重ね、日々冒す危険によって市民たちとギリシア人たちの全将来に対する不安を取り除き、他の人たちの幸福なる生のために自らの生を使い尽くしたのである。

これらの人々のお陰で、父親たちは榮譽ある者となり、母親たちは注目を

浴びる者となっている。姉妹たちは法に従ってそれ相応の婚姻を既に手に入れた者もあれば、これから手に入れることになる者もいるだろう。そして子供たちは、これらの死んだ者たちのというよりむしろ——何故なら立派なことのために命を捨てた人々がこの[死んだ者たちという]名を得ることは許されないことだからである——命を永遠なる座席と交換した者たちの有徳を、市民間の好意を獲得するための手形として所有することになるだろう。

他の人々にとっては最も忌むべき死というものがこれらの人々においては最大の善の原因となったのであるとしたら、どうしてこれらの人々を幸福でないとみなすことが正しいだろうか。また、どうして彼らが命を捨てた[とみなすことが正しいだろうか]。逆に、最初の誕生より一層立派な誕生が新たに起こったのだと[みなすことがどうして正しく]ないだろうか。実際、かつて彼らは子供であり無思慮であったが、今や勇敢な大人の男となった。そして、はじめ彼らは長い時間を費やし多くの危険を通じて勇徳を実証したが、今や彼らはその勇徳によって⁽¹¹⁾有名にそして男らしさ故に記憶に残る人々に(… 欠落 …)⁽¹²⁾。

これらの人々の勇徳を我々が思い出さないような機会があるだろうか。彼らが羨望と最も名誉ある称賛を得ている様子を我々が見かけないような場所があるだろうか。ポリスが繁栄している場合[にそのようなことがある]ののだろうか。しかし、これらの人々のお陰で実現した事柄のゆえに、これらの人々以外の誰が賛美され名声を獲得することになるのだろうか。あるいは、個々人が幸福である場合[にそのようなことがある]ののだろうか。しかし我々が安定的にそれら[個々人としての幸福]を享受することになるのはこれらの人々の勇徳に依拠してこそである。

また、如何なる世代の人々のもとで彼らは至福の人々ではないことになるだろうか。これらの人々のお陰で不安のない余生をおくり無事でいられることを認めている年寄り達のもとで[そうなる]ののだろうか。あるいは、同年代の者達のもとで[そうなる]ののだろうか(… 欠落 …)⁽¹³⁾。あるいは、若年者達や子供達のもとで[そうなるの]だろうか。しかし彼らはこの人々の死を羨み、この人々がそれと引き換えに勇徳を残したその生き方を手本として真似ることを熱望するのではないだろうか。かくして、これ程に大きな榮譽ゆえにこれらの人々の幸福を称えるのがふさわしいことではないか。

(… 欠落 …) ⁽¹⁴⁾。つまり一方で、彼ら[詩人たち]が心地よさを狙ってこのような忍耐強さについて語ろうとするのであれば、何がマケドニア人たちから自由を取り返した人々に対する賛美以上にギリシア人たちにとって心地よいものでありえようか。他方で、もし何らかの利益を狙ってこのような言及がなされるのだとすれば、如何なる言葉が勇徳並びにこれら勇敢な人々を称賛する言葉以上に聞く者の魂を益することができるだろうか。

〈4. 7. 将軍レオステネースは死後の世界においても幸福である〉

さて確かに以上のことから、我々ならびに他の全ての人々のもとで、彼らを高く評価せざるをえないということは明らかである。次に、黄泉の国においてこれらの人々の指揮者をどのような人々が歓迎することになるかを考えてみるべきである。

我々は、英雄と呼ばれる人々のうちトロイアへ遠征した人々がレオステネースを歓迎し賛嘆しているのを見ることになると思わないか。しかしよく似た行動を企てたこの男はこれらの人々を遥かにしのいでいたのである。というのは、これらの人々が全ギリシアと力を合わせて一つのポリスを奪取したのに対して、この男は彼の祖国だけの力でヨーロッパとアジアとを支配する全権力を恥じ入らせたからである。またこれらの人々が、侮辱された一人の婦人のために報復を行ったのに対して、この男は、全てのギリシアの婦人たちのために、今彼と共に埋葬されつつある男たちと力を合わせて迫り来る侮辱を阻止したのである。

また、これらの人々の後で生れた者の中でこれらの人々の勇徳に匹敵する偉業を成し遂げた人々、つまりそれは、ギリシアを自由にすることで祖国の名を高め自らの生を名誉あるものとした、ミルティアデースとテミストクレース周辺の人々およびその他の人々のことなのであるが、これらの人々をこの男はその勇敢さと思慮によって次の点で凌駕した。つまりこれらの人々が蛮族軍上陸の時点で報復をなしたのに対し、この男は上陸させないようにしたのである。またこれらの人々が祖国の地で敵が戦いを挑んでくる様を目にしたのに対し、この男は敵たちの領地において向かってくる相手を征圧したのである。

また、私が思うに、お互いに対する友愛を市民たちに対して最も確固たる仕方でも証明して見せた人たち、つまりハルモディオスとアリストゲイトーン

は、レオステネースとその戦友たち程にあなた方と親しい人たちは誰一人としていないと考えるだろう。また他方で、彼らが黄泉の国の中でこの二人と以上に親交を結ぶことができる人たちはいないのだ。それもそのはず。彼らはこれら二人の偉業に劣らない偉業を成し遂げたのであるから。いや、もし次のように言うべきであるなら彼らはそれ以上の大きな業績を成し遂げたのである。つまり、かの二人が祖国における暴君達を打倒したのに対し、彼らはギリシア全体における暴君達を打倒したのであるから。

おお、この男達によって為された大胆さの何と立派で何と想像を絶すること、彼らが決断した企ての何と有名で何と偉大なること、これらの人々がギリシア人たちにとっての共通の自由のために提供した勇徳と危険の中での勇らしさの何とずば抜けたものであること (… 欠落 …) ⁽¹⁵⁾

〈5. 遺族たちへの慰め〉

このような苦しみの中にいる人々を慰めることはおそらく困難であろう。悲しみへの世話は言葉や法によってなされるのではなく、各個人の気質と死者への友愛こそが苦しみを終わらせることができるのである。

それでもなお〔私は〕元気を出し、できる限り苦しみを取り除かねばならない。そして戦没者たちの死のことだけでなく、彼らが残した勇徳のことを語らねばならない。実際彼らは、悲嘆に値するようなことを被ったとしても、大きな賞賛に値することを為したのである。彼らは死すべき老年に与りはしなかったとしても、不老の榮譽を獲得してあらゆる点で幸福な者となったのである。

何故なら、一方で、彼らのうち子供をもうけることなく死んだ人々にはギリシア人たちによる数々の賞賛が彼らの不死なる子供となるだろうし、他方で、彼らのうち子供らを残していった人々には彼らのために祖国の好意がその子供たちの後見人として任ぜられるだろうから。

これに加えて、一方で、もし死ということが存在しないことと似たようなことであるとしたら、病氣や苦しみやその他人生に襲いかかるものから彼らは解放されていることになるし、他方で、もし黄泉の国においても我々が信じているように感覚と神霊による配慮があるのだとしたら、踏みにじられた神々の名譽⁽¹⁶⁾を救出したこれらの人々が神霊から最大の配慮と気遣いを受け取るのがもっともなことだからである。(… 欠落 …) ⁽¹⁷⁾

訳注

- (1) このセンテンスの「これから語られることになる言葉に関する証人は」以降に大きな欠落箇所がある。Colin による修復案を付け加えてこの箇所を訳出すると次のようになる。「これから語られることになる言葉に関する証人は（いかなる人間もそれ以上に立派なものを目撃したことがないような諸行為を実際によく知っている）時そのもの（であり、それゆえ、あらゆる時代において）これらの戦死者たち以上に優れた人々も一層立派な行為も（これまで存在しなかったとみなすべきである）。」
- (2) この欠落箇所に関して Burt と Colin はいずれも *paraleipsis*（「省略する」の意）という修復案を採用している。これによればこの部分の訳は「語ることは（省略）することとし」となる。
- (3) この欠落箇所に関して Colin は *hōsper*（「云わば」の意）という修正案を採用している。これによればこの部分の訳は「（云わば）怯えさせられ」となる。
- (4) Burt は彼の訳注において「実際にはレオーステネースはボイオティアにおける彼の勝利以前にテルモピュライを占領していたようである」と述べ、*Hypereides* の言葉の信憑性を疑っている。
- (5) Colin の訳注によれば、B.C. 335 年にテーベがマケドニア軍から受けた酷い扱いの生々しい痕跡をレオーステネースの兵士たちが B.C. 323 年の時点で目撃したとみなすべきであるという。もっとも Burt の訳注によれば、レオーステネースの兵士たちがボイオティアにおいて勝利をおさめたのはプラタイア付近であると考えられることから、プラタイアとテーバイとの距離を理由に、*Hypereides* の言葉の信憑性を疑うべきであるという。
- (6) アンピクテュオニア会議の母胎をなす「隣保同盟（アンピクテュオネス）」については、ヘロドトス『歴史（下）』（岩波文庫）の p. 337（同書 p. 128 のための第 2 の注）において、訳者である松平千秋が「アンピクテュオネスとは同一の聖地を共有する宗教的政治的同盟の謂いであるが、デルポイのアポロン社を中心とする同盟がその最も代表的なもので、ここに述べられているのもその同盟である。デルポイのアポロン社のほかにアンテレのデメテル社もまた

この同盟の共通の聖地で、同盟を結成するギリシアの十二の有力な部族の代議員が年二回(春にはアンテレ、秋にはデルポイで)会議を催した。アンピクテュオンは人類の祖ともいべきデウカリオンとピュラの子とされる」と解説している。またこの注に対応する本文(同書 p. 128, 3-5)の「ポイニクス河から十五スタディオンでテルモピュライに至る。ポイニクス河とテルモピュライとの中間にアンテレという小村があり、アソボス河はこの村を流れて海に注ぐ(7. 200)」(松平訳)というヘロドトスの記述から、春のアンピクテュオニア会議の開催地であるアンテレとテルモピュライの間の距離は(1 スタディオンを約 180 メートルとして換算すると)約 1350 メートルであることになる。とすれば、春のアンピクテュオニア会議に出席するギリシア人たちがその会議のついでに近隣のテルモピュライに集まって、その地を制圧したレオーステネースとその兵士たちの戦功を偲ぶことになるというのは納得のゆく話である。もっとも Burttt はここでの Hypereides の言葉に対して懐疑的である。彼の訳注によれば、レオーステネースの第二の戦闘の地がトラキスのヘラクレアであったと推定すべきであり、アンテレに集まったアンピクテュオニア会議の代表者たちがアンテレから遠く離れたヘラクレアの戦場を眺めることはできないと考えるべきであるという。さらに Burttt は「この会議はかの地では年に一度しか開催されないものであるし、全ギリシアを代表するものであるとは言い難い」と述べてもいる。

- (7) Jensen はこの文章の文意が通らないことから、文中の *anekleiptōs* (「尽きることのない」の意) という語に関してパピルスの段階でのテキストの毀れを疑っている。拙訳においては、Colin の提案に従って同文中の *kathesthanai* (「なる」の意) という語の前に否定辞 *mē* を想定し、さしあたり文意を通しておいた。
- (8) Colin の訳注によれば、ここでの「奴隷達」という言葉はアレクサンドロスの親友ヘパイステイオンを示唆するものである。Colin は「ここで問題になっているのは、同じ B. C. 324 年にバビロンで桁外れに豪華に埋葬されたヘパイステイオンのことである。アンモンの神託が彼を英雄として讃えることを命じていたのであった」と述べている。
- (9) 「殴られた」と訳した *plēgās labein* の *plēgās* という語を Burttt は「戦闘」という意味に解しているが、拙訳においては、戦争以外の場面で「殴られること」「打

たれること」（cf. Aristophanes, *Ranae*, 673, Thycydides, *Historiae*, 5.50）と解した。

- (10) この文中の *hē autonomia*（「自律」の意）という語の部分に関して Jensen はパピルスの段階でのテキストの毀れを疑っている。参考までに Colin と Burt はいずれも Fritzsche による修復案を受け入れて「自律がなければいかなることも完全な幸福をもたらさない」と読むべきであるとしている。
- (11) 拙訳においてはこの箇所 *tautēs* が指す語を Burt と同じく *tēn aretēn*（「勇徳」の意）と解し「勇徳によって」と訳しておいた。これに対し Colin はそれが指しているのは *kalliō genesin*（「一層立派な誕生」の意）という語句であると解し、*apo tautēs* に「一層立派な誕生に続いて」という意味になる訳語を与えている。
- (12) この文中の *tautēs* の語の後に欠落がある。Colin は *tautēs* の直後に *exest' euthys*（前者は「できる」、後者は「即座に」の意）の二語を想定する修正案を支持している。従って、Colin の主張を全面的に受け入れるとこの箇所全体は次のような訳になる：「今や彼らは一層立派な誕生に続いて（即座に）有名にそして男らしき故に記憶に残る人々に（なることができるのである）」。
- (13) Colin の提案に従ってこの箇所を訳すと「あるいは、同年代の者達のもとで[そうなる]のだろうか。（しかし、この人々が自らの勇徳のお陰で飛びぬけて名高くなったことによって、この人々の死が彼ら[同年代の者達]の心のうちに優れた意味での嫉みの情を注ぎ込んでしまっているのである）」となる。
- (14) Colin の提案に従ってこの箇所を訳すと「（どんな詩人がそしてどんな散文作家がいつの日かギリシア人たちのもとでかの人たちによってなされた業績へのありとあらゆる讃辞を欠くことになるだろうか。どんな人々のもとでこれらの人々の業績がブリュギア人たちを打ち負かしたかの遠征よりなお一層大きな称賛を受けなくなるだろうか。ギリシアの如何なる地域において彼ら[詩人と散文作家たち]が全ての子孫に対して絶えることなく散文と歌とによってこれらの人々の業績を賛美することをやめるであろうか。というのは[次に挙げる]両方の理由で、レオステネース並びに戦死した人々の業績の頌歌を歌うことが彼らにはできるであろうからである）」となる。
- (15) パピルスに残されたテキストはここで中断する。これ以降の〈遺族たちへの慰め〉をその内容とする断片はストパイオス（A. D. 5 世紀）の『詞

ヒュペレイデース断片『追悼演説』（訳）（野津）

華集』（*Florilegium*）124, 36 を通じて伝承されたものである。

⁽¹⁶⁾ Colin が訳注で指摘している通り、この言葉は、拙訳の注 8 で触れたような、マケドニア人たちの不敬虔な所業に対するギリシア人たちの批判を指していると考えうる。

⁽¹⁷⁾ 『追悼演説』の現存するテキストはここで中断する。なお Colin は、この後に続いていたはずの言葉は「戦死者たちの死をしかるべく嘆き悲しんだ後に帰路につくことを列席者たちに勧めるための、ごくわずかの伝統的な言い回し」（p. 279）のみであったと推測している。